

一夜限りの夜伽のはずが、
傷物令嬢は王弟殿下に淫らに翻弄される

プロローグ

「さあ、いつもの日課だ」

二人きりの休憩中に無情な声が響いた。

大きな窓から日差しが眩く差し込む、広々とした執務室でのこと。
魅惑の王弟殿下——イクシオンの美しい口元が弧を描く。

「——ッ！」

その一言に身体がビクツと震え、思わず動きを止めてしまった。

「オリビア、こっちへ来い。俺がこんなに気遣ってやるのは珍しいことなんだぞ」
「い、いりません！」

心外そうに話すイクシオンに対し、オリビアは眉間に皺を寄せて拒否を示した。
「お前に拒否権はないんだ。さっさとこっちに来て、ここに座れ」

椅子に座るイクシオンは自らの膝をポンポン叩くと、さらに深い笑みを浮かべた。艶のある流し
目でオリビアを催促している。

「——くッ」

悔しさに唇を噛み締めつつも、彼の膝に座る。

イクシオンはオリビアを後ろから抱きしめ、服越しに慎ましやかな膨らみにそつと触れてきた。

「んっ」

ただ乱暴に揉みしだかれるのではなく、イクシオンの触り方はとても丁寧で優しい。

「う、……っ」

胸が小さいなどと言わなければ良かったと、こうされるたびに後悔している。

自分は気にしていないと何度か訴えたが、聞き入れてもらえなかった。

あの時はまさかこんなことになるとは思っていなかった。

イクシオンは細かいところまでよく覚えていて、胸を成長させるための日課だと言って、こうしてマッサージのように揉んでくる。

「んっ……ふ」

そして、ただ揉むのではなく、刺激を与えるようにオリビアの胸の先端まで指先で弄ってくる。

「は、っ、んん……ん、んっ！」

先端を弄られるとすぐに甘い声があがってしまう。

ピリツとした子宮に直結するような鋭い快楽が走り、背中をしならせしているとイクシオンが後ろから首筋に唇を当てて吸ってきた。

「あッ！」

吸った箇所を舌で舐められ、ゾクゾクと肌が粟立つ。

イクシオンの手は変わらず胸に触れており、先端の硬くなった尖りを指で摘み上げられ、そのたびに身体が顕著に反応している。

「んあッ！ あ、あ！」

「ククッ、言葉は素っ気なくとも、身体は素直に俺を求めているようだ」

肩越しに笑いを含んだ彼の声が聞こえ、オリビアは屈辱と羞恥を覚えた。

しかし、イクシオンは器用にオリビアのブラウスの前ボタンを外し、手を滑り込ませて直接肌に触れてきた。

オリビアの硬く尖った先端に強弱をつけて、摘んだ指先を擦るように動かし始めた。

「やっ……！ あッ、あッ！」

身体中に走るビリビリとした強烈な快楽に、一層甘く甲高い声が響いた。

「ふっ……相変わらず、いい声で啼く。そんなに悦いのか？」

イクシオンとこんな関係になって初めて気づいたことだが、自分の身体はとても快楽に弱い。

それにイクシオンの手技が巧みすぎるのもよくない。

首を横に振って否定するが、胸を弄られているとどうしても秘部が疼いてきてしまう。

耐えきれなくなり、足を閉じて力を入れていると、そのことにイクシオンが気づいてしまった。

「——ああ、お前はここを弄られるのも好きだよな？ 胸と一緒に触られると、さらに愛らしく啼く。……違うか？」

イクシオンの手がオリビアの太ももを撫で、そしてスカートの中へと消えていく。

たどり着いた場所は、すでに蜜で濡れているオリビアの秘部だ。

「あ！ そ、こはっ……ん、違い、ます！」

遠慮もなく下着の中に指が侵入し、蜜を垂らしている孔を塞ぐように指がゆっくりと埋め込まれていく。

「んッ！ あッ、ああッ！」

潤んだ膣内に指が入ってくる感覚に、ゾクリと背筋が震える。

ここまでされるとオリビアはさらにぐずぐずになってしまう。

イクシオンの指が狭い肉壁を探るように巧みに動く。

「嫌じゃないだろう？ 腰も揺れて、俺の指がふやけそうなくらい蜜が溢れているぞ」

待ち望んでいた直接的な快楽に、頭も身体も高みへと導かれていく。

「あ、あッ！ んっ、ッ—— なっ!？」

しかし、先端を弄っていた指も、蜜孔を抜き差ししていた手も急に離れていった。喪失感に思わず後ろを振り返る。

「残念だが、終わりだ。そろそろロイズが戻ってくる時間だろう？」

「え……？ ……あ」

イクシオンに言われて時計を見ると、たしかに休憩時間が終わろうとしていた。

あと少しで絶頂を迎えるところだったのに。

こんな中途半端な状態では身体が^{くすくす}燻って仕方がない。

「俺はまだ続けてもいいが……仕事をしないとお前に怒られるからな」

「っ」

悔しさと甘い疼きがせめぎ合い、屈辱で身体が震えてくる。

どうしていいのかもわからず、服の前を手で合わせながら、後ろで微笑んでいるイクシオンを信じられない思いで見つめた。

「殿下。戻りましたー」

ロイズが戻ってきたのかコンコンというノックの音と共に、ドア越しに声をかけてくる。

「さあ、どうする？ 我が妃よ」

膝に乗せたオリビアを見つめ、艶やかな笑みを浮かべて答えを促してきた。

「——!」

やめろと言えば、イクシオンは素直にオリビアを解放するだろう。

だが、燻ったままでは仕事を続けることはできない。

だからといって簡単に頷き、お願いすることも理性が容認できない。

「あれ……？ 殿下あ？ 入りますよー？」

またノックが聞こえ、ドア越しに急かすようなロイズの声が響く。

焦りながら最善の答えを探す。けれど、それを邪魔するようにイクシオンの指が再びオリビアの秘部をなぞった。

「やッ、あ！」

「早くしないとロイズが入ってくるぞ」

小声で囁かれ、カリッと耳^{じだ}朵を軽く食^はまれる。

その瞬間、とうとうオリビアの欲望^がが理性を凌駕した。

「ッ、くっ……けて、ください……」

「なんだ？ 聞こえない」

「続けて……くだ、さいっ」

悔しさに唇を噛んだ。

負けたような気分だが、身体は熱を持て余し、解放を求めている。

「了解した」

イクシオンは満足そうに笑みを深くすると、ドア越しのロイズに向けて声をかける。

「ロイズ、あと一刻延長だ」

「はい？ 延長ですか？」

「さっさと行け」

「はあ……なんなんですか、もうっ！ わかりましたよ」

怒ったような声と足音が遠ざかる音が聞こえる。

それだけでオリビアはホッとした。衣類が乱れた、こんな姿を見られるわけにはいかなかった。

「さあ、行つたぞ。これでもまだまだ楽しめるな」

「ん、あッ！」

疼く秘部への愛撫の手が再開された。胸の突起も指先で摘まれ、その刺激にオリビアの身体が震える。

「う、んっ……！ 殿下は、やはり、あッ、鬼畜です！」

望んでいた快楽を得ることはできたが、悔しさがどうしても拭えない。

快楽に浮かされた瞳では意味がないと理解しつつも、悪態を吐かずにはいらなかった。

「クククッ……！ 実に心外だな。こんなに優しくしてやってるのに」

そんなオリビアの罵倒さえも楽しいのか、イクシオンの愛撫の手がさらに執拗^{しつよう}になっていく。

あまりの快楽に、傍にあつた執務机に縋^{すが}りついてしまった。

しかしその瞬間、背後から太い杭で貫かれる。

「んッ——ああッ！」

隘路^{あいろ}を押し広げる熱い雄が膣内を擦る感覚に、蕩けるような快楽を感じ、思わず息を吞む。

机はガタガタと音を立て、振動で積み上がった書類が小刻みに揺れている。

身体を繋げることが、こんなにも心地好いとは思ってもみなかった。

（契約結婚のはずだったのに……どうして、こうなってしまったんだろう……）

甘い感覚に支配される頭の片隅で、オリビアはこれまでのことをぼんやりと思い返した。

第一章 魅惑の王弟殿下イクシオン

オリビア・コンバート、二十五歳。

彼女には幼い頃から婚約者がいた。一つ年上のジャンはスミス侯爵家の次男で、跡取りのいなかったコンバート子爵家に婿入りする予定だった。

だが、ジャンには浮気グセがあった。オリビアは彼が他の女性という姿を時々見かけていたが、今のうちに適当に遊んでおけばいずれ落ち着くだろう、と安易に考えていた。今思えば、これがそもその間違いだった。

はつきり言ってオリビアは、ジャンのことが好きではなかった。

婚約者よりも父と共に領地を管理することに興味が有り、ジャンとはどうせ一緒になるのだからと放置してしまった。

コンバート領は海が近く、港もあり、国境が近かったので様々な国の人間が出入りしていた。父に習い、様々な国の言葉を覚えたり、領地に関する事柄を学んだりして忙しかった。

しかし、二十代になった頃。いよいよ本格的にジャンとの結婚の準備が始まった。

一緒に暮らすようになってわかったが、ジャンは想像以上にどうしようもないろくでなし男だった。

相変わらず女癖は直らず、屋敷にいても仕事をせず、しまいには領地へ赴くオリビアに悪態をつく始末。

オリビアをはじめ、家族や使用人たちも呆れ返っていたが、ジャンは侯爵令息ということもあり、強く言うことができなかった。

そして迎えた結婚式当日。

事件が起きた。

「おい、オリビア。お前はここで待機してろ。ここにいるアリーナが俺の花嫁だ」

「……は？ はあああつつ!？」

こともあろうかジャンは、浮気相手に花嫁衣装を着せてやってきたのだ。

そこからは大惨事だった。領地で開かれた結婚式にはもちろん、何も知らない家族や親戚、その他にも多くの人々が集まっていた。

父の仕事を手伝っていたこともあり、領民は皆、オリビアの顔を当然知っていた。

ゆえに、ジャンと共に入場してきた女性がオリビアでないことは一目瞭然だった。

「これは一体、どういうことなんだっ!？」

一同騒然の中、父の驚愕の声が式場に響いた。

式は当然取りやめになり、当事者であるジャンと浮気相手とオリビアが集められた。

だがジャンも、彼の家族からも謝罪の言葉などはなかった。

それどころか――

「女が家も守らず、外へ出て領主の真似事をするとはけしからん！ 此度の息子の行動は当然の結果と言えるッ！」

「なっ……！」

「息子を精神的に追い詰めた罪と、これまで無駄に過ごした婚約期間に対する賠償金を請求させてもらうぞッ!!」

そこからは地獄のような日々を送った。

父とスミス侯爵の言い争いが続き、両家での話し合いが開かれたものの、決着はつかなかった。

最終的に裁判にまでもつれ込んだが、オリビアたちの主張はまったく考慮されず、結果としてスミス侯爵家に多額の賠償金を支払う羽目になってしまった。

「お父さま、ごめんなさい！ 私のせいであつ……!!」

「いや、お前のせいじゃないよ。もともと婚約を提案したのは私なんだし、お前はずっとジャンの行動を我慢していただろ？」

心優しい父はすっかりやつれてしまった。

オリビアは自分が汚名を着せられたことよりも、父を苦しめてしまったことに途轍もないやるせなさを感じた。

「お父さま……私、決心したわ！」

「どうしたんだ？」

「あいつらに復讐してやるッ!!」

こうしてオリビアの復讐劇が幕を開けた――

自室に戻ったオリビアは早速計画を練ることにした。

「犯罪に手を染めないでジャンたちに復讐するのに一番いいのは、やっぱり身分の高い人に嫁ぐこと。となると、相手は最低でも侯爵家以上の爵位がないと……」

この世界の貴族女性が地位を上げる方法は、基本的に嫁ぐことのみ。

領地を受け継ぐことはもちろん、自分で起業することも許されていない。

しかしオリビアはすでに結婚適齢期を超え、今年で二十六になる。

加えてそこまで秀でた容姿ではなかった。背中の半分ほどまで伸びた焦茶色の髪を、いつも一本にまとめて縛るくらいで、特別な手入れなどはない。

色白が好まれるこの国で、外に出ることの多いオリビアの肌はうつすら日に焼けている。

空色の瞳は悪くないものの、瞼はぼつちりとした二重ではなく奥二重だ。密かにコンプレックスを感じている。痩せ型で胸もさほど大きくなく、背もこの世界では低いほうに分類される。

なによりジャンのせいで破談となり、『傷物令嬢』の汚名を着せられた。その上、スミス侯爵家と確執が生じ、生家は賠償金まで背負っている。

オリビアの結婚は絶望的だった。

「はあ……私が嫁げるのはお金持ちのお爺さんの後妻くらいかな。高位貴族に嫁ぐなんてまず無理だろうし。どこかにいないかな、いい相手が――」

しばらく机に突っ伏していたオリビアだったが、パッとある人物が思い浮かび、勢いよく顔を上げた。

「——そうだ！ 一人だけいるっ！」

勢いのまま机の引き出しを開け、入っていた書類をかき分け、奥のほうにある古びたノートを取り出した。

「あった！ 記憶が戻った時に書いておいて良かった！」

取り出したノートを自分の胸にぎゅっと抱きしめた。そのノートにはこの世界には存在しない文字で『癒しのアフロディーテ 攻略対象者』と書いてある。

ペラペラと古いノートのページを捲^{めく}つていき、一番最後のページでオリビアの手が止まった。

「私が復讐を成し遂げるには、もうこの人しかいない。魅惑の王弟殿下、イクシオン・アーク・ライアー……！」

ノートを持つオリビアの手に力が籠^{こも}る。

前世のことはほとんど覚えていないのだが、なぜかこのゲームのことだけは細かく記憶していた。そして、この世界がゲームの中だということに気付いていた。

改めて書いてあった内容を頭に叩き込んでいく。

オリビアのいるこの世界は、実は前世でプレイしていた乙女ゲームの世界だった。

その名も『癒しのアフロディーテ』。

主人公のアフロディーテは攻略対象者四名の中から一人を選んでシナリオを進め、様々なエン

ディングを迎える。

そんなゲームの中で、イクシオンは一番難易度の低い攻略対象者だった。

彼は無類の美女好きで、医師を目指す貧乏貴族のアフロディーテは誰もが認める絶世の美女。ゆえにイクシオンはアフロディーテと出会うなり、その美しさに一目惚れし、積極的に迫っていく……というのがイクシオンルート of 冒頭だ。

要するに言い方は悪いが、美女なら誰でもいいようなチョロい攻略対象者なのだ。

(たしか……この世界で実際にアフロディーテと結ばれたのは、第一王子メルディオだった)

ということは、おそらく今——イクシオンが統治している領地は深刻な問題に見舞われているはず。

ゲームの中で彼の領地の問題が解消されるのは、アフロディーテに攻略対象者として選ばれた時のみだった。だが、この世界の彼女はメルディオを選んでしまった。

「イクシオンの領地はここからかなり遠いけど、馬車を乗り継げばなんとか辿り着ける。私なら領地問題を解決する術を知ってるし、向こうはこの国でトップレベルの地位を持つてる絶好の相手。お互いの利害は完全に一致してる！」

幸か不幸か、自分は美女ではない。

ゆえにイクシオンに異性として興味を持たれることはない。

だが、彼が一番頭を悩ませている領地問題を解決することができる。

これと引き換えにイクシオンに契約結婚を申し込めば、互いの問題をすべて解決できるのではな

いかとオリビアは意気込んでいた。

思い立ったが吉日とばかりに、オリビアは早速行動に移した。事情を説明し、まずはどうにか父を説得した。

「わかった。お前が行くと決めたのなら、私はもう止めないよ。ただでさえ長い間、お前には我慢を強いてきたんだ。……だが約束してくれ。決して、無茶だけはしないと」

皺を刻んで笑った父の顔は、やはり疲れており、言葉とは裏腹に寂しさも垣間見えた。

父の様子に少しだけ後ろ髪を引かれつつも、次の日からオリビアは支度に取りかかった。それほど広くもない部屋の片隅で、小さなカバンに衣類や必需品を詰め込んでいく。

「あつ、そうだ。このノートも持っていないと……」

古びたノートを手に取り、ベッドの上に腰かけた。

オリビアが前世の記憶を思い出したのは、十年ほど前。何かの拍子に頭を強く打ったことがきっかけだった。

今いるこの世界が、前世でプレイしていた乙女ゲームの中だと気づいたものの、すでにジャンと婚約を結んでいたし、とくに思い入れもないゲームだったので記憶を生かして何かしようという気も起きなかった。

ただ、やはりゲームに出てくるキャラクターたちは王族や高位貴族が多い。

これからジャンと共に領地を治める身としては、自分の持つ記憶が何かしらの形で役に立つので

はないかと思ひ、このノートに思い出せる限りの情報を書き記したのだ。

(まさか、こんな形で役に立つとは思わなかった。このノートの存在自体忘れてたし)

ペラペラと無造作にノートを捲り、最後のページで止まった。

そこにはイクシオンに関する情報が事細かに書かれている。

(王弟、イクシオン・アーク・ライアー殿下……貴方は、私の味方になってくれるのかな?)
パタンとノートを閉じ、オリビアはそのままベッドに倒れた。

そして数日後。

「それでは、行ってまいります！」

荷物を両手で持ったオリビアがコンバート家の門の前に立っていた。

「ああ、気をつけて行くんだぞ！」

「お姉さま、本当に行ってしまうの!？」

見送りに出てきてくれたのは父と妹の二人だけだった。賠償金のせいで財政難になってしまったため、使用人はもうほとんど残っていない。

母が幼い頃に亡くなったオリビアには、父の他に五つ離れた妹が一人いた。

傷物令嬢になってしまったオリビアに代わり、妹とその婚約者がこの領地を治めることに決まった。幸い、妹の婚約者はジャンとは違い、とてもできた人間だった。

「エリーゼ、あとは頼んだから。お父さまを支えてあげて」

「ううっ……、こんなの酷いわっ！　なんでお姉さまが出て行かなくてはいけないの!?　お姉さまは何も悪くないのにっ!!」

オリビアはエリーゼに、新たな結婚相手を探すためしばらく家を空けると説明した。心優しい妹は、オリビアが家を追い出されたかのように感じているのだろう。

「——大丈夫。ジャンよりも良い相手を見つけて帰ってくるから。それまで家のことは貴女に任せたらね」

「相手なんて見つけなくていいんですよ？　私が一生お姉さまを養いますから！」

「あ、ありがとう。もしもの時は、お願いね……」

「もちろんです！　どうか、お氣をつけて」

涙ながらに話すエリーゼにオリビアは笑顔を向け、手を振って馬車に乗り込んだ。

（最後に友人たちとも話したかったな。とくにトウバラと会っておきたかったけど、外国船は月に一度しか来ないし……それまでは待てないから）

海に向こうに暮らす、トウバラの元氣いっぱいな笑顔を思い出す。同い年の彼女とは長い付き合いで、互いの国の言葉を教え合う旧知の仲でもあった。

——もう、この領地に戻ることはないのかもしれない。

エリーゼにはああ言ったが、帰ってきたところで『傷もの』となった自分には居場所などないだろう。

馬車の窓から故郷の風景を眺め、二度と見ることでできない景色を目に焼き付けていた。



乗り合いの馬車を何日も乗り継ぎ、途中で体調を崩しながらも辿り着いたのは、王弟イクシオンの治める土地、ライアーロードだった。

昼頃、町に着いたオリビアは馬車から降り、遠目に見える領主の城を眺めていた。

（ここがイクシオンのいるライアーロード……遂に、やってきたんだ！）

荷物を手に持ち、改めて気持ちを奮い立たせる。

ふと周りを見渡すと、商店が軒を連ねているが、どことなく活気がない。

住民たちの顔色も冴えず、道行く人の足取りも重いように見える。

（ここライアーロードの土地にはある秘密が隠されている。イクシオンルートを選ぶと、医師を目指しているアフロディーテがそのことに気づいて、この領地が悩まされていた問題を解決するんだだけ……）

現実世界でのアフロディーテは、第一王子とすでに結ばれている。このままでは、この領地の問題が解決されることはないはずだ。

人々の様子を窺いながら、オリビアは城に向かう道をゆっくりと歩いていく。

馴染みのない土地とはいえ、父と共にこれまで領地の管理に携わってきた身として、オリビアは事態の深刻さをまざまざと感じ取っていた。

決意を新たに城までの足を速めることにした。

そびえ立つ大きな城を間近で見上げ、オリビアは驚嘆していた。

ひとまず、城の前にいる門兵にイクシオンと話せないかと尋ねてみる。

「王弟殿下との謁見は、現在取り次いでおりません」

「殿下ではなく、側近の方でもよろしいのですが……」

「そちらも同じく取り次ぎはできかねます」

オリビアを一瞥すると、門兵は再び正面を向いて無言になった。

こんなことは想定内だったオリビアは荷物を地面に置くと、門兵から少し離れた場所に座り込んだ。

「では、お会いできるまでここで待たせてもらいます」

「……いくら待たれても無駄だと思いますが」

「無駄にはならないので気にしないでください。ご迷惑にならない場所で座っていますから」
座り込んだオリビアに、門兵は呆れたような顔をしていたが、退けとは言われなかった。

「あの、門兵さん。一つ、質問してもよろしいでしょうか？」

「殿下に関わるご質問はお答えいたしかねます」

「違います。殿下に関することではなく、門兵さんに質問なのですが……」

「自分にですか？」

槍を持つて直立不動を貫いていた門兵だったが、自分に質問してくるとは思っていなかったのか、意外そうに顔を向けてきた。

「ええ。実はここに来る前に町を歩いてきたのですが、なんだか領地の皆さんは顔色が悪くて元気もないみたいで……この人たちはずっと前からこうだったのですか？」

「いえ。自分は生まれた時からここに住んでますが、このように変わってしまったのは二年ほど前からです」

「二年前……」

「はい。それまでは町も活気に溢れて賑わいを見せていました」

イクシオンに関係のないことだからか、門兵は素直に答えてくれた。

この門兵も仕事に忠実なだけで、悪い人ではないのだろう。

「ちなみにですが、その二年前に何か変わったことはありませんでしたか？ 例えば、何か大きな事件があったとか、もしくは大きな災害が起こったとかは……」

オリビアの言葉に何か思い当たる節があったのか、門兵は少し考えた後、口を開いた。

「強い地震が何度か起きました。今でもたまに揺れますが、二年前はとて大きく揺れたんです。この辺り一帯の家屋が倒壊し、怪我人や死者が数多く出ました」

「それは大変でしたね……その時に、他にも災害が起こりませんでした？」

「——そういえば、川が氾濫はんらんしました。山から大量の土砂が流れてきて……後始末が物凄く大変でした。幸いにも、川の水が町に流れ込むことはなかったのですが」

（やっぱり。この領地の人たちに元気がないのは、きっとゲームと同じ原因だわ）
座って話を聞いていたオリビアだったが、門兵の答えを聞き、立ち上がる。

「質問に答えていただき、ありがとうございます。あなたのおかげで、この土地の人たちがなぜこうなってしまったのか、原因がわかりました」

「なっ……！ 本当ですか!? そういえば、貴女は一体……?」

門兵は驚いたのか、目を丸くしてオリビアを見ている。

「私は地方から参りました。地質研究家のオリビアと申します。この領地の噂を聞き、協力できることがないかと訪ねてきた次第です」

「そのような理由で訪ねて来られたのですか!」

「ええ。初めにお伝えせず失礼いたしました」

地質研究家という肩書きは真つ赤な嘘だが、この領地の人々を脅かす原因がわかったというのは本当だ。

「——わかりました。自分から上の者に掛け合ってみます。しばしお待ちくださいっ!」

慌てた様子で門兵は城の中へと入っていった。

残されたオリビアは頭の中で計画を再確認し、イクシオンとの対話に備えた。

門兵のおかげか、意外なほどあっさりと中へ通された。

光沢のある大理石の床が一面に広がり、外から観るよりもさらに城内は広く感じられた。

天井も高く、綺麗に手入れされた調度品や絵画がセンスよく飾られている。

「荷物はお預かりいたします。どうぞこちらへ」

侍従に促され、城の奥へと進んでいく。

何回か階段を上り、大きな二枚扉の前に案内された。すぐに両開きの扉が左右に開かれ、さすがのオリビアも緊張して背筋を正した。

部屋の中には二人の人物がいた。

そのうち、執務机に向かうその人こそが、オリビアのターゲットであるイクシオン・アーク・ライアーだった。

「王弟殿下にご挨拶申し上げます」

頭を下げてから両手でスカートを広げ、丁寧な挨拶をする。

「儀礼的な挨拶はいい。それより、お前が言っていたことは本当か?」

顔を上げたオリビアは、その声の主の姿を改めて観察する。

輝くような銀髪と、オリビアを見つめる金色の瞳に思わず目を奪われる。

気高さと品を兼ね備えた美しい顔立ち。襟の大きく開いた胸元から覗く肉体は、溢れんばかりの色気を漂わせている。

（本物の、イクシオンだ……とくに思い入れはなかったけど、こうして実物を見るとやっぱり美形ね）

なぜ彼が『魅惑の王弟殿下』と呼ばれているかという点、全年齢向けであったこの乙女ゲームの中で、唯一露出の多い人物だったからだ。

おまけに美女ならば誰でも甘い言葉で口説き、男女の駆け引きが得意で、美しい顔立ちを武器に迫る。まさに魅惑の攻略対象者、といわんばかりの設定を盛り込まれていた。

前世のオリビアはゲームをしながら、顔が良いだけのただの女好きだと思っていた。だが実際に本人を見ると、ただただその美貌に圧倒された。

「ええ。私はこの土地で起きている、原因不明の病を治すことができます」

「な、なんということでしょう！ それが本当ならば、ものすごい発見ですっ！」

イクシオンの隣で控えていた側近と思われる人物が驚愕の声を上げた。ブラウンの長い髪を一まとめにして、黒縁の眼鏡をかけた真面目そうな男性だ。

「お前、名はなんと言う」

金色の瞳でまっすぐに見つめられると身体に緊張が走る。

だが、オリビアは視線を逸らすことなくイクシオンの瞳を見つめ返した。

「私はオリビアと申します」

「ではオリビア、お前が知っていることを教えてくれ。ここで起きている病の原因は一体なんなんだ？」

「もちろんお答えいたします。殿下、この領地で起きている病の原因は——」

ゆつくりと丁寧な言葉を選び、少し間をおいて、相手の反応を確かめながら話していく。

イクシオンの隣にいる側近がゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

「実は、鉱物にあります」

イクシオンを射すくめるように、強い視線を送る。

「鉱物？ 山の中から見つかる石や金属のことか？」

「ええ、その通りです。この領地で二年ほど前、大きな地震が起きたとお聞きいたしました。その際に近くの川に土砂が流れ、氾濫したとも……」

「——ああ、そうだったな。あれは酷い災害だった。まさか、それが原因だと？」

「はい。土砂に混じり有毒な鉱物が川へと流出し、その水を生活に使っているため、ここの領民たちは中毒を起こしているのです」

本来ならこれは、ヒロインのアフロディーテがイクシオンと共に調べた結果わかる事実だった。それを横取りしているようで心苦しい部分もあるが、アフロディーテが第一王子を選んでしまった今、この領地を救う道はこれしかなかった。

「まさか、そんなことが——」

側近が驚きの声を上げる。

イクシオンは椅子に座ったまま、信じがたいような表情を浮かべ、片手で口元を覆った。

「このまま川の水を使い続ければ、いずれ死に至る者も出てくるでしょう。ですので、今すぐ毒が流れ出している地点を探し出して堰き止めるか、別の川から水を確保することをお勧めいたします！」

最後の言葉はとくに強めの口調で言い切った。

部屋の中がシーンと静まり返っている。

しばらくの静寂の後、口を開いたのはイクシオンだった。

「その話に根拠はあるのか？ 飲み水を供給している川を変えることは、言葉で言うほど簡単じゃないぞ。それに、お前の話には信憑性がない」

口元を覆っていた手を外し、イクシオンは鋭い視線でオリビアに問いかけてきた。

（てっきり、私の話に飛びついてくるかと思っていたのに、意外と冷静だな。イクシオンって美女にしか興味がなくて、わりと適当な性格だと思っていたのに……ちよつと見直した）

イクシオンの意外な一面に感心しつつも態度には出さず、オリビアは返事をする。

「では、証拠をお見せいたしましょう」

「証拠？」

「ええ。今からその問題の川へ向かいましょう。そちらに行けば、私の言っている意味がわかると思います」

淡々と語るオリビアとは対照的に、イクシオンは荒々しく椅子から立ち上がった。

「向かうのはいいが、そこに行くには馬車が使えない。馬に乗って向かうしかないぞ」

そう話しながら、イクシオンが一歩ずつ近づいてくる。

「わかりました」

「馬には乗れるのか？」

オリビアの目の前で立ち止まったイクシオンはかなりの長身だった。見下ろされるとかなりの威圧感を覚える。

「なんの問題もございません」

だがオリビアは怯むことなく、さも当然のように答えた。

ライアードまで休憩なしで馬車を使い続けたオリビアにとって、これから馬に乗って移動するのはかなり体に堪える。

しかし、イクシオンに自分の話を信じてもらう最大のチャンスを逃すわけにはいかない。

「じゃあついてこい」

「はい」

「ロイズ、馬の準備をしろ」

「は、はいっ！ わかりました」

オリビアは踵^{かかと}を返し、自分の横を通り抜けていったイクシオンの後について行く。

ロイズと呼ばれた側近も後続き、三人で部屋を出た。

馬に乗り、山道を駆けていく。

側近のロイズは少し遅れて後ろを走っていた。

「お前、ずいぶん乗り慣れてるじゃないか！」

結構なスピードで馬を操りながらも、イクシオンは余裕の表情でオリビアに話しかけてきた。

隣を並走しているオリビアにそこまでの余裕はないが、どうにか返事をする。

「子どもの頃から乗っていたのでっ！」

馬の駆ける音がうるさくて声を張り上げる。あまり喋っていると舌を噛みそうなので短く答えた。

「よし！ 来いっ！」

どこか楽しげに話すイクシオンは、さらに馬のスピードを上げた。まるで競争でもしているかのようにに山道を猛スピードで駆け抜けていく。

（もうっ、イクシオンは何がしたいの!? レースしてるわけじゃないんだから！ こっちはついていくのがやつとなのに!）

どうにかイクシオンの後ろをついていくと、視界が開け、草原が現れた。

その奥には川が流れている。

ようやくイクシオンはスピードを落とし、川の手前で馬を止めた。

「見る。この水が町へ供給されている」

目の前にはそこまで大きくはない川が広がっていた。一見すると綺麗な水が流れているように見える。

「もう少し上流へ行きましょう。おそらく崩落した地点はここより上だったのではないですか？」

「ああ、そうだ。川の上流は崩落が酷く、領民たちを立ち入り禁止にしている。俺も災害があつてからは、しばらく立ち寄っていない」

「では現場を見に行きましょう」

まだロイズは来ていなかったが、馬を降り、とりあえず二人で川沿いを歩いていくことにした。

「――なっ！」

しばらく歩き、上流へ辿り着くと、そこには悲惨な光景が広がっていた。

魚が水面にプカプカと浮かび、息絶えている。さらに周囲の草木は一部を残して茶色に変色し、枯れてしまっている。

（やっばり、ゲームと一緒だ。アフロディーテもこの光景を見て衝撃を受けていた）

「見てください、殿下。これが体調不良の原因です。周りの生態系にも影響が出ています」

同じくイクシオンも言葉を失っていたが、オリビアの問いかけに重い口を開いた。

「……しかし、ここを堰き止め、水路を変えたとしても、すでに長い期間毒物を摂取していた領民たちは――」

「お任せください。そちらも解毒効果のある薬を作ることができます」

川を見つめたまま言葉を詰まらせたイクシオンが、オリビアの言葉に即座に反応した。

「本当か!？」

「ええ。ですが、一つ条件があります」

「条件……？ なんだ？ なんでも叶えてやるぞ。好きなだけ褒美は取らせる！」

解決策を提案されたイクシオンは、食い気味にオリビアへ迫ってきた。

だがオリビアは冷静さを崩さず、彼を見上げる。

「いいえ。褒美はいりません」

「では、何が条件だ？」

オリビアは近くに咲いていた白い花を一輪手折ると、その場で跪いた。片手を胸に当て、その花をイクシオンの前へと捧げる。

「——イクシオン・アーク・ライアー王弟殿下、どうか私と結婚してください」
「けっ、こん……？ 俺とか？」

差し出された花を前に、イクシオンが目を見開いて狼狽^{うろた}えている。

「ええ。殿下に求婚しています」

オリビアは跪いたまま、真剣にイクシオンを見つめる。

彼は花を前にして、困惑しつつも思案するような表情を見せたが、受け取ることはなかった。

「お前が、俺に？」

「はい。それが条件です。それ以外のものはいりません」

スツと立ち上がったオリビアは、やはりイクシオンから視線を外さず、持っていた花を自分の胸元に寄せた。

「——意図はなんだ？ お前は俺のことを好いているわけではないだろう？」

「よくわかりですね。話が早くて助かります。仰る通り、私は殿下のことをどうとも思っておりません」

はつきりと断言したオリビアに、イクシオンは複雑そうな表情を見せている。

「……では、なぜだ」

「殿下は領民を救いたいと願っている。そして私は、殿下の持つその地位を求めているのです」

「俺の地位？」

「そうです。私に必要なのは殿下ご自身ではなく、殿下が持っている王弟という地位です」

きつぱりと言い切ったオリビアは、今度は両手でイクシオンの前へ花を差し出した。

「——はあ……、話が長くなりそうだな。ひとまず城へ戻るぞ。そこで詳しく話を聞こう」

深くため息をついたイクシオンは、差し出された花をパッと受け取ると、自分の懐にしまった。

「わかりました」

花を受け取った様子を見るに、満更でもないということだ。手応えを感じ、オリビアはホッと胸を撫で下ろす。

「はあ、はあ！ ふう……。あれ？ 殿下、どうしたのですか？」

遅れてやってきたロイズが息を切らしながら尋ねてきた。しかし、イクシオンはその脇を通り過ぎていく。

「戻るぞ」

「え？ え？ お、お待ちください！ せっかく追いついたのに、また戻るんですか？！」

ロイズは半泣きになり、通り過ぎたイクシオンの後を追っていく。

（この人、イクシオンに振り回されて可哀想……）

オリビアも後に続きながら、ロイズに同情していた。

城へと帰った三人はまた先ほどの部屋へと戻り、今度は応接用のソファアに腰掛けた。

「——で、俺に結婚を申し込む理由を教えてもらおうか？」

「け、けっ、結婚っ!？」

後ろで話を聞いていたロイズは、立ったまま眼鏡をズラす勢いで驚いていた。

「ちよつ、ちよつとお待ちください！ 川の話が、なぜ急に結婚の話に変わっているのですか!?」
先ほどのやり取りを見ていないロイズからすれば、結婚の話は寝耳に水だろう。

「まあ、色々あってな。どうやらこの問題を解決する代わりに、俺と結婚してほしいようだ」
「はいいい!？」

事の成り行きをわかっていないだけに、ロイズの驚きようは端から見ている面白いくらいだった。

「正確には契約結婚です。私が領地問題を解決する代わりに、期間限定で婚姻を結んでいただきました」
「はい」

「契約結婚か……その理由は？」

その場で姿勢を正し、向かいで様子を見定めているイクシオンへ鋭い視線を送る。

「――復讐です」

「復讐？」

「はい」

視線を逸らすことなく、はっきりと肯定する。

「お前の目は嘘を言っていない。わかりやすく説明してみろ」

オリビアは大きく息を吸い、そして長めに息を吐いた。

「私には、幼い頃から婚約者がいました――」

順を追ってこれまでの出来事を説明する。私情はなるべく挟まず、状況だけをわかりやすく話

した。

「ハッ……、クズだな」

「ええ！ ただの最低な男じゃないですか。それでなぜあなた方が賠償金を請求されるのかわからないのですか!?」

この返答を聞いてオリビアはホツとした。

もしイクシオンが婚約者だったジャンの行動を非難せず、肯定するような意見を述べればこのまま立ち去ろうと思っていた。

「おそらく、圧力をかけたのでしょう。相手は侯爵家ですから、いくらでも裏から裁判官に取り入ることができます」

「それで、そいつらに復讐するためにお前が目を付けたのが、この俺だということか……」
腕を組んで聞いていたイクシオンがため息混じりに呟いた。

「はい。もちろん、断っていただけでも構いません」

「だがその場合、お前は解毒薬の作り方を明かすことはないのだろうか？」

「ええ、仰る通りです」

またはっきりと言葉を返すと、今度はイクシオンがオリビアに鋭い視線を送ってきた。

「お前に危機感というものはいいのか？ 立場を盾にして、俺がお前に吐けと命令したらどうするつもりだ」

「私はその命令に従う謂れはございません」

「お前をこの場で捕らえて拷問し、強制的に吐かせることもできる」

「お好きなようにされて構いませんが、私は殿下がそのような非情なことをする方ではないと知っています」

お互い一瞬も視線を逸らさず、会話を続けた。

しかし、イクシオンが大きくため息をついて顔を横に向けた。

「お前は……かなり厄介なやつだな。どこで聞いたか知らないが、俺についてよく調べている」
調べたというより、ゲームを通して知っているのだ。

イクシオンは自由奔放で飽きっぽい性格だが、女性に対してひどいことをするような愚かな人間ではない。

なので、これまでの彼の発言は脅しのようなものだと思われていた。

「殿下の心中は深くお察しいたします。ですが……、私も生半可な気持ちではなく、相当な覚悟を決めてここまでやってきました。身勝手なお願ひですが、それだけはご理解いただきたいのです」
俯いたオリビアは唇を噛み締め、膝の上のスカートをぎゅっと握り締めた。

「——お前が必死なのはわかった。俺はお前の持つ情報が欲しい。そしてお前は、俺の持つ地位を利用したい」

ソファアに腰掛けたイクシオンは長い足を組み、静かに話し出した。

「はい」

「いいだろう。その契約、結ばせてもらう」

「はぁいいい!? で、殿下! 本気ですか!」

ロイズの驚く声が響き渡る。

オリビアもまた、少なからず驚いていた。まさかイクシオンがこんなに簡単に契約を結んでくれるとは思っていなかった。

「本当ですか?」

「なんだ、意外だったか?」

「はい。てつきりお断りされるものかと……」

「そうしたらどうするつもりだった?」

窺うように金色の瞳で見つめられて言い淀む。

腐つても王族だからか、美しい顔立ちだからか。イクシオンからは他の人間とは違うオーラのようなものを感じた。

「……しばらくしてから、また訪ねようかと思ってました」

「しつこいやつだな」

「諦めるつもりは一切なかったのだ」

「クククッ、ずいぶん肝の据わった女だ!」

オリビアの返答が気に入ったのか、イクシオンは愉しげに笑っていた。

「ただし、契約内容はこちらで決めさせてもらう。お前の意見があるのなら、この場で言え」

「私は、殿下の妃という立場さえお借りできれば、どんな条件でも飲みます。ですので、他の条件

はそちらで決めてくださって結構です」

「あとで後悔するなよ……」

イクシオンに妖しげに微笑まれ、思わずドキッとした。

視線から滲むそこはかとなない色気に動揺しつつも、オリビアはどうか平静を装う。

「先ほども申し上げましたが、私は生半可な気持ちでここまで来たわけではないのです」

「——いい度胸だ。ロイズ、紙とペンを持て」

「あ、はい。殿下……本当に契約的な婚姻を結ばれるおつもりですか？」

「ああ、最近退屈していたんだ。まさかこんなふうに婚姻を申し込まれるとは思ってもよらなかった。これだから人生は面白い」

（とりあえず、イクシオンの興味を引くのに成功して契約を結んでもらえた。なんとか第一段階は達成できたな……）

オリビアは目を閉じて、安堵の息を吐いた。

だが、まだ油断してはいけない。

契約を結んだところで、イクシオンが味方になったわけではないのだ。

あくまで契約上の関係。それを忘れてはいけない。

「そういえば、契約期間はいつまでにするつもりなんだ？」

一息ついていたオリビアに、イクシオンが視線を向けて問いかけてきた。

「半年後、建国祭があるはずです。その時、殿下が共に夜会に出席してくださいだされば私の復讐は達成

されます」

建国祭では、伯爵家以上の貴族は皆、王都に集まることになっている。だから、オリビアはそのタイミングでジャンに復讐しようと画策していた。

「建国祭か……そんなに後の話なら、俺に契約を持ち掛けるのは今じゃなくても良かっただろう？」

イクシオンに指摘され、オリビアは思わず言葉に詰まる。

確かに自分の計画だけを考えれば、建国祭が始まる少し前に契約結婚を持ち掛けても良かった。

「それは、そうなのですが……」

言うつもりはなかったが、視線を少し下に落とし、ボソボソと自分の本音を語りだす。

「そうするとその間も、ここの領民の方々は何も知らずに鉋毒に蝕むしばまれてしまうじゃないですか。それをただ黙って傍観しているのは嫌だったので、早めにかしてあげたいと……そう思っただけです」

オリビアはこれまで父と共にずっと領地を見守ってきた。

関係ないと言ってしまうばそれまでだが、ここにいる人たちはずっと苦しみ続けている。それぞれの生活があり、それぞれの人が懸命に生きている。

それを理解している以上、自分の都合だけを考えて行動することはどうしてもできなかった。

「——そうか」

静かに話を聞いていたイクシオンは一言そう発して、ロイズから紙とペンを受け取り、サラサラと契約条件を記し始めた。

オリビアはソファ―に掛けたまま、その様子を見守っていた。

「よし、書けたぞ。ほら、お前も確認しろ」

「はい」

手渡された紙に書かれた条件を上から読んでいく。

何項か書かれていたが、大体は予想していたことが並んでいた。

だが、最後の一行にオリビアの視線が止まる。

（ん？ 『妻は夫に対し常に献身し、いかなる時でも妻としての務めを果たさなければならぬ』……？）

わずかに引かなかったが、イクシオンは美女にしか興味がないはずだ。ということは、シンプルに契約中は彼の言うことを聞け、という意味だろうとオリビアは解釈した。

自分は契約の間、この領地に留まり、解毒薬を作って領民たちを救えばいい。

その見返りとして、王弟殿下の妃という立場を手に入れ、建国祭で復讐を果たすのだ。

「私はこの条件で構いません」

「本当にいいんだな？」

念を押してそう言われると不安になるが、他に気になる部分はなかったので躊躇いながらも頷いた。

「……はい」

半信半疑で返事をした後、オリビアは別の紙を自分の鞆から取り出し、机に広げた。

「殿下。こちらにも同時にサインをお願いいたします」

「これは？」

「離縁状になります。こちらが殿下がお持ちください。契約終了後はすぐに離縁いたします。それに、もし私が契約に反することがあれば、契約不履行ということで離縁状をお使いいただいて構いません」

イクシオンは淡々と説明するオリビアを興味深そうに見つめていた。

「結婚契約書と共に離縁状まで書かせるとは、ずいぶん周到なことだ」

含み笑いを見せた後、イクシオンは離縁状にもサツとサインをして印を押した。

「ではこれで、契約成立だ」

イクシオンはその場で立ち上がり、笑顔で手を伸ばすとオリビアに握手を求めてきた。

（やっぱり見た目がいい人って得だね。笑っただけで、うっかり見とれちゃいそうだった）

「はい。不束者ではございますが、どうぞよろしく願います」

オリビアも立ち上がり、躊躇いながらも手を伸ばす。

ぎゅっと握られた手は温かった。

「それで早速だが、解毒薬について聞きたい」

手を離れたイクシオンはオリビアを見下ろすと、今度は真剣な表情で尋ねてきた。

「ええ、もちろんです。――私が先ほど殿下にお渡しした花はございますか？」

「花？ ああ……これか？」

イクシオンが思い出したように懐から無造作に取り出した花は、すでにくたりと萎しれていた。

「その花こそが解毒薬の元になる材料です」

「——なっ！　これが、解毒薬だったのか!？」

「そうです。あの過酷な環境下で生き残れたこの花には解毒作用があるのです」

「お前は……突然求婚してきたかと思えば、その時の花が解毒薬に必要なものだったとは。なかなか一筋縄じゃいかないやつだな」

「お褒めにあずかり光栄です」

「ククク……！　俺の予想は当たったな。お前といると退屈しなさそうだ!」

さも楽しげに笑うイクシオンを見て、側近のロイズが目を丸くしている。まるで珍しいものを見るかのようなだ。

「あの殿下が、こんなに楽しそうに笑うなんて……」

そんな呟きがオリビアの耳にも届いた。

この日からオリビアは城で暮らすことになった。

部屋を用意してもらい、侍女もつけると言われたがそれは辞退した。

自分のことは自分でできるし、いずれこの城を去ることになる以上、変に情が移るようなことは避けたかった。

イクシオンはというと、オリビアと契約を結んだ後、すぐに王都へ向かった。

そして、三日経ってから領地へ戻ってきて、こう告げた。

「ひとまず異母兄上に婚姻を許可してもらえた。ただ、お前の顔を見たいから王都に連れてこいとのことだ」

早速、最初の難関がやってきた。

イクシオンの腹違いの異母兄であるルードヴィッヒ三世は、この国を治める君主だ。

五十二歳である彼は、二十九歳のイクシオンとはなんと二十三年が離れている。親子ほどの年の差だが、れっきとした異母兄弟だ。

「私は問題ありません。行けと言われればいつでも行きます」

「お前はいつも淡々としているが……緊張はしないのか？」

イクシオンは眉根をわずかに寄せ、オリビアの顔を覗き込んだ。

「もちろん緊張しています。ですが、ある程度予想していたことなので。殿下の異母兄上様なので、すから、ご挨拶に伺うことは想定内です」

「まあ、そうなんだが……お前は冷静すぎてつまらん」

「はあ。では、もつと大袈裟に驚けばご満足でしたか？」

「なんと言うか、お前はなかなか可愛げのないやつだな」

「それは……元婚約者にもよく言われていました。可愛げがない、色気もない、お前は愛想笑いの一つもできないのか、と」

「うっ……。そういうつもりで言ったわけではないんだが……」

さすがに悪いと思ったのか、イクシオンは視線を逸らして言葉を濁した。

「私自身もそう感じているので、お氣になさらず。殿下だけが感じていることはありません」
ジャンには昔から散々言われていた。

健気にも、幼い頃は彼に好かれたくて頑張った時期もあった。子どもの頃からどうしようもない婚約者だったが、それでも一生を添い遂げる相手だからと精一杯笑いかけ、服装にも氣を使った。しかし、それをことごとく台無しにしたのもジャンだった。笑った顔が不気味だと言われ、服装の趣味が悪いと罵られた。

今なら鼻で笑うようなことだが、幼かった当時のオリビアは言われた言葉を真に受けてしまった。女として努力したところで意味がないと感じ始めたのも、その頃からだった。

「まあいい。それより今後についてだ。俺たちの式は今からひと月後、領地の教会で略式で挙げる予定だ。その後、さらに二週間経ってから王都へ向かう」

「……式を挙げる必要はないと思うのですが。省くことはできないのでしょうか？」

自分たちは契約結婚だ。しかも半年後には離縁する。
できるなら領民たちに自分がイクシオンの妃になると認識してほしくなかった。

「王位継承権を放棄した身とはいえ、俺は王族だ。さすがにそれはできない。本来なら何日にもわたり、パレード形式で婚礼の儀を行うものだからな。これでもかなりロイズに無理を言って簡略化させたんだ」

「そうでしたか……ご尽力いただき、心より感謝申し上げます」

イクシオンの説明を聞き、オリビアは大人しく引き下がった。そして、ゲームの設定を思い返す。
ルードヴィツヒ三世は王にしては珍しく情に厚く温厚な性格で、年の離れた異母弟のことをとても可愛がっている。

イクシオンもまたそんな異母兄を慕っており、成人を迎えた際、甥である二人の王子に次の王位を譲ると宣言した。おかげで無用な後継者争いをせずに済むと、ルードヴィツヒ三世はいたく喜び、イクシオンに公爵位とこの領地を授けたのだ。

「——ところで、お前のその口調はいい加減なんとかならないのか？」

「と、おっしゃいますと？」

「俺は部下と会話してるわけではないんだぞ！　これから俺の妻になるのだろう。もう少し砕けて話すことはできないのか？」

「そう言われましても……」

これもある意味、線引きなのだ。

（認めたくないけど、やっぱり乙ゲーの攻略対象者だよな。とくにイクシオンはやたらと露出が多いし、美形だし……変な氣を起こさないためにも、やっぱりある程度の節度は保たないと）

オリビアとしては、今くらいの距離感がちょうどよかった。

さりげなく、目の前にいる彼から視線を逸らす。ゲームの設定通り、今日も王弟殿下は無駄に色氣たっぷりだ。シャツのボタンが何個も外れており、魅惑的な肉体が露わになっている。

お互いのためにも、自己防衛はしておかなくてはならない。

「私たちはあくまで仮初^{かりそめ}の関係です。書類上は夫婦でも、実際の関係は大きく異なります。殿下もそのことをお忘れなきよう、お願いいたします」

こんなことばかり言っているから、可愛げがないと言われるのだろう、とオリビアは心の中で思う。

「そう言っているのも、今だけだと思え」

こちらを見下ろしていたイクシオンは低く屈むと、視線をオリビアに合わせてきた。いつも挑むように見上げていた美貌が突然目の前に現れ、途端にドキッと心臓が跳ねる。

「っ！ どういうことですか？」

動揺を悟られないように表情を崩さず、間近に迫る美しい顔をジッと見つめ返した。

「お前はわかっていない。契約とはいえ、夫婦になるということがどういうことなのか」

トンツと人さし指で軽く身体を突かれ、意味深に上目遣いで微笑まれた。心臓がバクバクと早鐘を打ち、落ち着かない気持ちになる。

「ですから……今と変わることはない……」

「では、そう思っているといい」

顔を上げたイクシオンは相変わらず笑ったままで、余裕を窺わせる表情がオリビアの癪に障る。

「殿下がなんと言われようと、私は変わりません！」

強気な口調で言い返したが、フツと笑ったままイクシオンは部屋を去っていった。

パタンと扉が閉まると、オリビアは力が抜けたように床にへたり込んだ。

（はあ……さすがは、魅惑の王弟殿下。なんとしても距離を保たないとダメだ。なるべく素っ気なく対応してるのに、逆に面白がられてる気がする）

その場で大きくため息をついて、オリビアは床から立ち上がった。

イクシオンがどんな態度で来ようと、自分は自分の信念をもって接するだけ。オリビアの目的はあくまで復讐だ。

それを忘れないように心掛けよう、とオリビアは決意を新たにした。



イクシオンの領地に来てから二週間ほどが経った頃。

オリビアは机の上で書類に囲まれながら、ペンを片手に突っ伏していた。

「ロイズ、さん……、終わり、ました……」

「おお、さすがは妃殿下！ 仕事が早くて助かります！」

「……その呼び方は、やめてください」

書類仕事で疲労困憊^{こんぱい}のあまり、顔だけを横に向けて、書類を受け取ったロイズにボソツと呟いた。喜ぶロイズの背後では、イクシオンが優雅にお茶をしながらお菓子をつまんでいる。

「殿下……私たちが結んだのって、奴隷契約でしたっけ……」

「おかしいことを言うやつだ。れっきとした結婚契約だろう？」

ティーカップから口を離し、美しい流し目をこちらに送るイクシオンに、言い表しようのない苛立ちを感じた。

「では、なぜこんなに、朝から晩まで馬車馬のように働かされているのですか……？」

「それはだな、お前が優秀すぎるのが悪い。指示も的確だし、書類の処理も早い。解毒薬の製造から治水工事の手配まで、少なくとも数ヶ月はかかると思っていたが、お前は二週間で処理してしまったんだからな。恨むのなら自分の能力を恨め」

「おおっ！ あゝ殿下がここまで褒めるなんて！ 妃殿下は本当に素晴らしい才能をお持ちですね！」

この二週間、オリビアは持ってきたノートを眺めてゲームの知識を思い出しながら、医師や薬師と共に解毒薬を作った。

さらにイクシオンと共に何度も現地に赴き、問題の川を堰き止め、どうにか別の川から生活水を確保できるように整えた。自分で言うのもなんだが、かなり頑張ったと思う。

オリビアはムクツと机から起き上がり、訝しげな視線をイクシオンへ送った。

「……褒められている気がしないのは、気のせいでしょうか？」

「お前は素直じゃないやつだな。こんなに褒めてやってるのに」

「殿下は褒め方が下手すぎます」

ああ言えばこう言うといった感じで、二人のやりとりはいつも通りに繰り返されていく。

もともと父と共に領地管理をしていたオリビアにとって、こういった仕事は苦ではなく、むしろ

やりがいを感じていた。

跡継ぎの座から外れ、無駄になったと思っていた経験が思わぬところで役に立って嬉しいくらいだ。想定外に働かされていることを除けば。

「とりあえず、書類仕事は終わったので私は出かけます」

席から立ち上がったオリビアは、上着を羽織ると扉のほうへと歩いていく。

「どちらへお出かけですか？」

ロイズが声を掛けてきたので、ドアノブに手を掛けたまま振り返って返事をする。

「治水工事の点検に行つてまいります。新たに引いた水路がきちんと機能しているか確認しておきたいので」

「なんて素晴らしいのでしょう！ ちょっと、殿下も少しは妃殿下を見習ってくださいよ！」

足を組んで寛いでいたイクシオンはカップをテーブルに置くと、腕を組んでからかうように笑っている。

「お前は女にしておくのがもったいないくらいだな。なんなら従属契約も結びたいくらいだ」

「馬鹿げた発言はおやめください。——こんな能力、あったところでなんの意味もありませんから」

呟くように言い残し、一方的に会話を終わらせた。

そのまま部屋を出て、廊下を早足で歩いていく。馬を借りて、慣れた体さばきで走らせる。

(過ぎたことを後悔したつてしょうがないのに……それよりも、今できることに集中しよう)

沈んでしまいそうな気持ちを奮い立たせるように、馬の速度を上げた。

それから数日後、オリビアは領民たちの様子を確認するため、いつものように町へ出かけていた。しかし、珍しくイクシオンも同行していた。

「なあ、我が妃よ。俺の理想の女性はどこにいますか？」

「……私にわかるわけじゃないですか。それよりも、その呼び方はやめてくださいませんか」どこへ行っても自由奔放な彼は、外でも変わらない。

最近、イクシオンはオリビアを『我が妃』と呼ぶ。初めて呼ばれた時に思い切り嫌な顔をしたなら、そこから面白がつてこう呼ぶようになってしまった。

「美しい女性は数多に存在するが、俺の心を揺り動かすほどの美女はなかなかいない」

オリビアはイクシオンの自由さに呆れながら、「はあ……」と返事をした。

並んで歩いていると、通り過ぎる女性たちが立ち止まり、頬を染めてイクシオンをうっとり見つめている。

「俺の運命の相手には、一体いつになったら出会えるのか……」

「だから知りませんって」

「ああ、運命の人よ！」

あーだこーだとあまりに隣でうるさいので、人の多い町中でオリビアは美女を探して紹介するのにした。

「はあ……でしたら、あちらの方はいかがでしょう？　なかなかの美人ですよ」

少し離れたところに、オリビアの目から見ても美しいと感じる女性が歩いていった。

「うーん……美しいが、いまいち惹かれないなあ」

「では、向こうの赤髪の女性はどうかでしょう。美形な上に素晴らしい体型をしていらつしやいます」

さらに反対側の店の前に、見るからに豊満な美女が友人らしき人と話していた。

「すべてにおいて素晴らしいが、なんだか違う気がする」

「あつ、あちらの女性もいいんじゃないですか？　人目を引く美女です！」

「確かに美女だが――」

美女と思われる人物を見繕っているのだが、イクシオンは気に入らないようでいちいち難癖をつけてくる。

しばらく付き合っていたオリビアも、しまいにはピキッと青筋を立てて早足で歩き出した。

「もう面倒なのでご自分でお探してください！　私は忙しいので殿下の戯れに付き合っている暇はありません！」

「ああ、相変わらず我が妃は冷たい」

わざとらしい口調で悲しむふりをするイクシオンに、オリビアの神経がさらに逆撫でされた。

「冷たくて結構です！　遊びに行きたいのなら、どうぞご自由に。あとその呼び方はやめてください！」